

冠省

不躰ながら、御著『南雲忠一』の一読者としてお便りをさしあげます。資料を博搜され、大局に立った客観的な立場から南雲提督の人間像と戦績を描いたご労作を感銘ふかく拝読いたしました。

私事になりますが、私にとって南雲大将という方は、単に過去の軍人として葬り去ることのできない印象のふかい存在です。というのは、ひとつには米沢興讓館の先輩にあたるからです。南雲は明治 38 年に興讓館中学校を卒業して海兵に入っております。ちなみに、東北大の総長だった高橋里美先生や英文学者で評論家の本間久雄氏はその 1 年先輩にあたります。

私は昭和 19 年の春、旧制米沢興讓館中学校に入学しました。あとから思えば、すでに敗色濃厚であった時期だったわけですが、私たちはそれを知らされることもなく、日本の勝利をひたすら信じておりました。そのころ、私たち興讓館の生徒たちにとって南雲將軍は母校が生んだ輝ける英雄でした。まだミッドウエイの敗戦を知っておりませんでしたから、果敢な真珠湾攻撃を敢行した艦隊の総指揮官として仰ぎ見る存在でした。

南雲戦死の報は当時の興讓館の生徒にはたいへんショッキングな出来事でした。「南雲に続け」と叫ばれたことを記憶しております。翌年、20 年に南雲將軍の息子さんが入学してきました。何番目の息子さんかもわからず、名前も失念しましたが、疎開してこられたのだとおもいます。写真の將軍にそっくりでしたが、色白の都会の子らしい少年でした。どちらかといえば、ひ弱な感じでした。

豊田穰「波まくらいくたびぞ」で南雲一家の写真を見た時は、ほんとうになつかしくおもいました。將軍の前に座っている少年です。私には偉大な提督の子息というより、父を失った子という印象が強かったように覚えています。何度かことばを交わしましたが、終戦になって米沢を去ったようです。いつとはなく、校内に姿を見なくなりました。その後しばらく、どうしておられるのか、気になっておりました。

そのような個人的な感情もあって、無能な指揮官とか凡将というような南雲に対する一面的な酷評には領けないものを感じておりました。たしかに、ミッドウエイ戦をはじめ、批判されてしかるべき点が多くあることも事実でしょうが、彼ひとり責任を押し付けられてはいないか、疑問におもっておりました。御著はまことに公正で行き届いた視点を堅持しておられるようにお見受けして、快い読後感を得ることができました。